



歴史を生かしたまちづくり横濱新聞 第38号番外編

「佇まい」を甦らせた西洋館の改修工事
～ 山手133番館 所有者・改修設計者インタビュー ～

Interview about "Bluff No.133"

令和3（2021）年3月に横浜市認定歴史的建造物となった山手133番館が一年三ヶ月に及ぶ改修工事を追え、新たに生まれ変わりました。一連の工事や洋館について、所有者である株式会社三陽物産代表の山本博士氏と改修設計者である株式会社ユー・エス・シー代表の兼弘彰氏に話を伺いました。





左：兼弘彰氏（山手 133 番館改修設計者 / 株式会社ユー・エス・シー代表） 右：山本博士氏（山手 133 番館所有者 / 株式会社三陽物産代表）
聞き手：横浜市都市整備局都市デザイン室

- 本日はよろしくお願ひします。

山本・兼弘：よろしくお願ひします。

- まずは、この山手 133 番館を取得された経緯やきっかけについて教えてください。

山本：実は、最初は不動産情報サイトに広告が掲載されているのを見たんです。なんとなく建物に見覚えがあって「歴史的建造物では…」と直感的に頭をよぎったんです。元々横浜の歴史に興味があって「都市の記憶」をよく読んでいたし、外国人に貸しに出されていた時代、10年前くらいかな、現地に見に来たことも有って。それで、当時の都市デザイン室長に問い合わせして「本物の西洋館、歴史的建造物ですよ」と教えていただきました。兼弘さんに問い合わせしたら、彼もよく知っている建物で、保全方法を考えようと話になりました。兼弘さんとは 10 年ほど前にシ

ンポジウムで初めてご挨拶させていただいて、ちょくちょく連絡を取っていたんです。不動産会社に確認したら既に業者が何社か来ていて、測量や擁壁築造替えの見積もりまでやっているところも有った。それを兼弘さんに伝えたら「山本さんが買わなかったら絶対残らない」「自分も極力協力するから」と。それで所有者さんに会い保全したい思いを伝えて交渉し、なんとか取得できました。

当初、現地は 2 年くらい空き家で庭も建物も荒れていました。内見に初めて行った時、外見はみすばらしく「これはちょっとな」と思ったんだけど、中に足を踏み入れた瞬間に本物の洋館が放つ雰囲気を感じて、「あ、これは壊しちゃいけない」と思ったんです。以前、『『雰囲気』というのは具体的にどんなことですか?』と聞かれ考えたんですが…例えば、高い天井、マンツルピース、上げ下げ窓、「洋館らしさ」のキーワードが有るじゃないですか。それはそうなんだけど、実際には言葉で表現できるものじゃない空気感みたいなものが有るな、と思ったんです。

- 今仰られた「空気感」はとても大切と思うのですが、山手 133 番館は大掛かりな改修を終えた今も、空気感が残っていますよね。そうした点は改修の際にも意識されていたのでしょうか？

山本：綺麗にし過ぎても雰囲気が残らないから、残せる箇所は残して趣を感じられるようにする、兼弘さんはその加減が絶妙。その点で僕は彼を尊敬しているんですが、そういう人がいなければ事業自体をやっていなかったですね。

兼弘：「洋館の佇まい」という点は強く意識しました。結構な数の洋館を見てきましたが、古ければ残るのか、という一概にそうでは無く、残っていくためには人に愛される佇まいが必要だと思っています。佇まいは、言葉を変えると表情、残っていくための力みみたいなものですね。初めに 133 番館を見た時は、改変が多く佇まいが覆い隠されていた印象を受けましたが、その奥にある「本当だったら…」という姿は想像できました。素直に元の材料を残すよう方針を決めて解体していくと、元々の色味や姿が徐々に浮き彫りになってきました。

最近建物のストック活用や長期優良住宅というような考え方が主流になってきましたが、一方でやはり建物は飽きられると壊されてしまいます。裏を返せば、100 年残る建物には取り壊しの危機を乗り越えるような力がある。そ

れがまさしく佇まいだと思うんですね。だから、それを取り戻すことが一番の肝と思っています。建物を大幅に変えてしまうと、その瞬間は喜ばれても次の代まで残っていくことは中々難しくなる。だから、建物のロケーションも含めて大事な要素を残し、最大限生かすよう設計しました。

- 山本さんは所有者・施主として、兼弘さんが仰った考え方に最初から共感されていたのでしょうか？

山本：そうですね。兼弘さんの仕事の一つに、神奈川県庁の前に開通合名のレンガ壁を残した例があります。もちろん倒壊しないよう補強はやっているんですが、レンガ壁の雰囲気、明治時代の空気感を引き出しているんですね。そこに哲学が宿っている、と思ったんです。

- 今回の改修工事の概要を教えてください。

兼弘：少し専門的な言い方ですが、大きく分けて「修理工事」、「補強工事」、「整備工事」の三種を行いました。

「修理」は悪い箇所を直すことですね。外壁の傷みや屋根の雨漏り、内壁の劣化などを修理しながら、全体を元の姿に戻していく。外壁は、当初の層の上に白い塗装が行われていたため、高圧洗浄で上の層を剥がしながら当初の壁の色を明らかにし、その色味で全体を復元しました。屋根も



改修以前の山手 133 番館



耐震補強工事の様子
既存床を解体し抱き基礎を新設し、
既存の躯体に結合する。
工程は左上→右上→左下→右下の順

健全なフランス瓦は活かすようにし、健全でないものは交換していきました。

「補強」は構造体を補強し耐震性能を高めてあげる工事。健全な材を極力活用しながら、傷んだ土台等を交換したり耐力壁を追補したり、既存基礎に加えて抱き基礎を新設し結合したり、それらを通じて耐震性を高めていきます。

「整備」は住めるように機能性を高めてあげる工事です。例えば冷暖房などの設備を追加、といったことです。

- 機能的には最新の設備が導入されていますが、「歴史的建造物である」ということと性能面のバランス感をどう捉えていましたか。

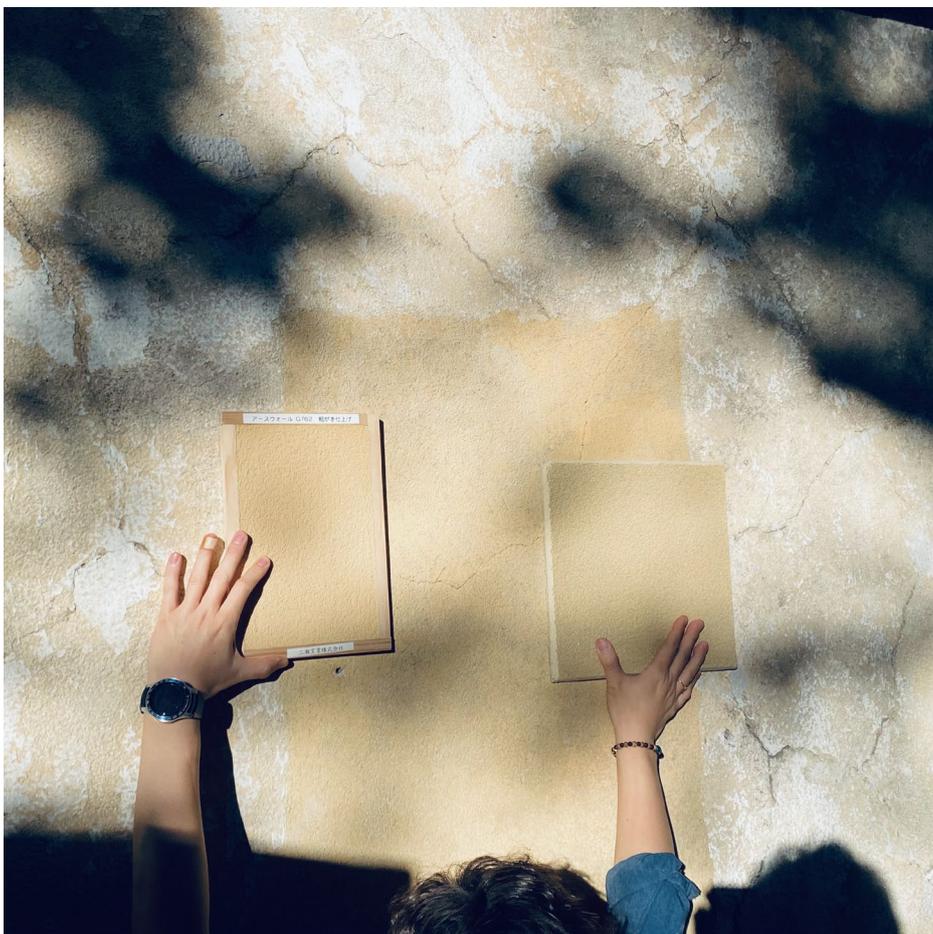
山本：「人が住める洋館を目指す」という考え方が大きいですね。町屋を民泊にした、みたいな場所が今は結構有りますが、そういうところに泊まるのが好きなんです。実際行ってみると、100年200年前の建物であってもキッチンやお風呂などは最新の設備を入れていて、他の箇所に古い雰囲気が残っていても快適に過ごさせてしまう。だから兼弘さんには、水回りは現代の生活に耐えられる仕様にしてくださいと頼みました。保全が第一目標でしたが、やはり洋館を買うからには将来外国人に貸すことも選択肢に入れたい。だから、古い雰囲気はもちろん残すけど、最新鋭の仕様を入れてもらうようにしました。

- 改修工事で特に大変だったことを教えてください。

兼弘：この建物は何度も改修されていますが、良い改修ばかりではなかったようです。特に外壁は水の排出経路が塞がれていて、長年水が溜まってしまっていました。そのため、外壁を解体して初めて、想像以上の土台の腐朽が判明しました。土台は建物の根幹なので、本来は上物を全てやり替えるくらいの大事なのですが、建物をジャッキアップして交換することで、なんとか上物を活かすことができました。それでも完全に予定外の工事だったため、費用や期間には大きな影響がありましたね。

山本：土台は当初、「3割位は腐っているかな」という想定でしたが実際は8~9割腐朽してて、ウッドショックも重なり木材が入って来ず工事が二週間止まったりしてね…。でも確かに苦労はしたけど、本来工事が止まるようなトラブルも兼弘さんだから乗り切れた、というのは有りますよ。普通の業者がこの工事を請け負ったら、多分「これは誰にどう頼めば良いんだろう…」と悩むことが物凄くあったと思います。兼弘さんは、歴史的建造物の修復に長けた人との繋がりを沢山持っていて、繋いでくれたから改修工事を終えられたんだと思います。

工事を受注した松井建設さんは寺社仏閣や伝統建築にも強いところ。屋根瓦は調査したら思いの外割れていて、交



改修工事の様子
左：壁材の色・質感合わせ
右上：既存瓦の解体保管・調査
右中央：窓木製ガラの塗装
右下：腐食していた木躯体の更新



換せざるを得ないところを、中澤高枝邸（横浜市認定歴史的建造物）の修復で余ったフランス瓦の事を兼弘さんが知っていたから譲り受けることができました。それでも数が足りなかった使用人棟の屋根瓦も、フランス瓦に日本一くらいに詳しいフジイ瓦工業の藤井さんに依頼して、戦前のフランス瓦の型を偶然見つけられたから愛知県の窯で焼いて対応しました。そういう縁が無かったら全く違う屋根になっていたと思います。レイブリックスの刈田さんは、外壁に厚塗りされた塗装を高圧洗浄で剥がす技術を持っていて、彼がいなかったら外壁の色も復元できなかったと思います。

- 歴史的建造物の保全活用にはそういった集合知が非常に重要だと思いますが、今までの蓄積の中でネットワークを作ることは意識されていたのでしょうか。

兼弘：そうですね。日本では1000年以上前から受け継がれている木造建築の技術が残っている一方、近代、ここ100～150年位に使われている技術はどんどん失われてい

ます。その技術を調べて復活させ、現代の仕様とミックスさせるのは、興味や情熱がある職人じゃないと不可能です。仕様書や契約だけでは人選できないですね。だから日頃から繋がりを作って、今回の工事でもネットワークをフル活用しています。職人さん達も高齢化、廃業傾向に有って、狭い地域で人を見つけるのは中々難しい。なので、結局全国から人を集めました。

山本：だから現場で何気なく工事車両を見たら新潟ナンバーだったりするんですよ。小田原からリシンの仕上げをできる職人さんが来てくれたり…全国から遠征してくださって、一つの洋館の改修工事に技術の粋が集まっていることがとても印象的でした。現場は常に10人以上の職人さん、それも超ベテランの匠がそれぞれ腕を振るっていましたね。

兼弘：普段こういった工事に携わりの少ない電機や機械設備の方々も、「いかにして建物の歴史性を失わせないようにするか」と強く意識してくれましたよ。



一階玄関横の階段 照明器具は竣工当初の器具をリペアして使用している



山本：やっぱりガンガン穴を空けたりできないしね。

兼弘：一緒に検討して理念を伝えていくことが大事だと思っています。仕事好きな職人さんであれば、一緒に仕事していると段々と理解してくれます。施主の山本さんも毎日のように来てましたね。

山本：そうだね、ほとんど毎日。コロナ禍で出張が少なかったこともあってね。

兼弘：施主が自分たちを見ている、情熱を注いでいる大事な仕事なんだ、ということを現場が感じ取って、それが良い仕事に繋がったと思います。

- 施主に情熱が無ければ建物は残らなかったし、ましてここまで綺麗になることは無かったと思います。

兼弘：本当にそう思います。あと、山本さんは現場とのコミュニケーションをつぶさに取られていて、ボロボロの状態からの過程、苦労や工夫を全部認識されていましたね。

山本：兼弘さんが腐ってるところばかり見せるから嫌でも理解しましたよ（笑）。それで兼弘さんに一度「酷い状況

なのに落ち込まないの？」と聞いたら、東日本大震災で津波に晒された遺構の復旧（※気仙沼市の男山本店魚町店舗復原工事）に比べたら新築みたいなものだよ、と言うわけです。歴史的建造物の世界ではこれくらい大したことない、と兼弘さんがどっしり構えていて非常に心強かったですね。

- 工事プロセスを Youtube で配信したり、完了した今はみなとみらいホールと連携してオルガンコンサートを実施したり、発信に力を入れられていますよね。

山本：もちろん PR の意味合いもありますが、やはり自分がワクワクすることを共有したいというのが原動力です。Youtube には今動画が 10 本上がっていて、それとは別に撮りためた動画が何本も有るから編集して上げていきたいと思っています。

- 普及活動を見ていると、無理して PR しているのではなく純粋に共有したい、という印象を強く感じます。

山本：ありがとうございます。動画を見てくれた人が、自分たちも古いものを残そうって、そう思ってくれると良いなど。あとは、もっと要綱（※歴史を生かしたまちづくり要綱）のこと等も認知してくれると良いな、と思います。

今回の現場は、みんな楽しんでやっていたと思います。修復中も広報活動も、それぞれに係ってくれた人がとても楽しんでいました。オルガンコンサートの話が出ましたが、オルガニストの早川さんも2日に一回くらい133番館まで来て練習されていました。

兼弘：このオルガン（※㈱三陽物産が所有する、居留地時代の横浜で活躍した楽器商・ドーリング商会が輸入したリードオルガン）はオーク材、ナラでできています。133番館にも多数使われている材ですが、馴染みが良く音がよく響く。オルガンは置かれている環境でコンディションが変わるらしいですが、元から建物に置かれていた気がするくらい馴染みが良かったですね。私も今回の工事はとても楽しんでいました。終わっちゃうのが寂しかったくらい（笑）。

山本：兼弘さんが大らかだから、みんながテンパっていても纏まるんですね。僕は予算が追加だなんだってワーワー言っていました。そういうやり取りをしても落ち着いているんですよ。そういう人格だったから、現場を楽しく終えられたんだと思います。

- お二人とも非常に楽しんでやられていたと思うのですが、歴史文化を残す取り組みに生きがいを感じて、生業にまでしているのは何故なのでしょう。

山本：うちの会社は「お菓子を通じて横浜の歴史文化を継承する」というスローガンを持っています。普通の企業の目標は利益を出すことですが、うちはその先に目標を持と

うと幹部で話していて、稼いだお金で横浜のまちに貢献することを考えて活動をしています。地元横浜で歴史文化を残していくためにお金を使っていこう、と。生業と仰いましたが、会社の存続意義をそこに見出しているんです。少し悩ましいのは、僕らが好きなことをやるとお金が出ていくこと。好きなことをやってお金が入ってくる人の事は少し羨ましい（笑）。兼弘さんはそれが仕事になっていて稼ぐことができますよね。私の立場は、究極を求めれば求めるほどお金が出ていく、そこは中々悩ましいですね。

兼弘：私は、そうですね…133番館のような保存修理の現場が存在する大きな意義の一つとして、「技術を伝承すること」があると思います。現場が無いと建築の修理の技術はどんどん失われて、一旦無くなると復活することは難しい。日本人は150年くらい前までは国土が狭く森林であふれた国で輪廻転生を繰り返す木造建築と付き合ってきて、材を大事にする技術は世界でもトップクラスだったと思います。今のような「保存修理」みたいな言葉は無く、それが当たり前前の世界。それがこの100年の間で、最も木造住宅の寿命が短い国になってしまった。20年以上昔、カナダのバンクーバーアイランドに行ったことがありますが、その森林はその時既に7割が伐採され、うち8割が日本に木材として輸出されていたと聞きました。日本は輸入材を使ったスクラップ&ビルドを繰り返して、では国内林業はどうかと言うと、安価な輸入木材に押されてどんどん追いやられています。それを続けていくと文化が無くなってしまふ。そういう危機感が有って、だから私の仕事を見た人が少しでも歴史文化を「大事だ」「残さなきゃ」と感じてく



山手 133 番館オルガンコンサートの様子（横浜みなとみらいホール主催「パイプオルガンと横浜の街 2022」連携企画）



れば良いと思っています。経済社会の中では逆風の仕事だと思いますが、日本人が当たり前にやっていたこと、その精神・文化を残していかなければいけないな、と。それで、新しいものを生み出す人はたくさんいるけど、私は当たり前に有ったものを発信できるようになるう、と思いました。この洋館の床はオーク材ですが、世界的にほとんど無くなってきています。

山本：木造が日本で一番高価な建造物になってしまうかもしれないですね。

兼弘：そうですね、今はウッドショックで国内木材の需要が高まり高騰していたりします。健全化までは難しいと思いますが、日本の林業システムを少しでも活性化していかないといけないと思います。

- 生活やシステムと結び付くからこそ、生業が「文化」に成熟していくんだと思います。今は歴史的建造物の保存と言うと無理をして修復していると思われがちですが、保存していくことが本来の健全なシステムに繋がる、という考え方も有るかもしれないですね。

兼弘：法隆寺は世界遺産になりましたが、その時の評価として重要なことは、「世界の建築のスタンダードから逸した

こと」なんですね。それまでの西洋的な建築の考え方と全く違うアジアの建築文化の考え方が価値づけされたんです。法隆寺は1300年以上も建ち続けていますが、当然ずっと同じ状態で残っているのではなく何度も解体修理されています。保存技術の継承と木材の供給システムの維持が一緒に行われているからこそ、世界最長寿の建造物になり得ている。つまり、アジア・日本の建築の考え方は、全くエターナルなものではなく、技術と一緒に輪廻転生を繰り返していく存在だということです。文化財の世界で「凍結保存」と偶に言いますが、元々凍結保存では全くないんですね。

山本：僕は、教科書通りかもしれませんが、魅力あるまちは「個性のあるまち」だと思うんです。例えば、どこかにコンビニがあって、大きなショッピングモールがありますよ、と言ったって、それは全然魅力にならないですね。じゃあ個性は何で表現されるかと言ったら、やはりまちに積み重ねられた歴史、土地独自の歴史だと思うんですよ。それを感じられることが魅力。

横浜ほど150年少々でここまで激動したまち、他に無いじゃないですか。開港と同時に日本一の貿易港になって、そのあと関東大震災で壊滅的な被害を受けて、やっと復興してきたと思ったら第二次世界大戦や空襲でまた焼野原になってしまう。それから見事復興を遂げて、今住みたいまちナンバー1とかになっている。僕は中区で生まれ育って

企業経営していて、自分が肌で触れてきた横浜は魅力あるまちだと思っています。でも一方で、50何年で景観、歴史の風情が無くなっていく実感も有って…だから、自分の力で守れるものが有るのなら、それを守り魅力を維持したいという思いが有るんです。133番館は外国人居留地がルーツで上げ下げ窓や煙突があって、広い庭が有り遠くに海が眺められる…いかにもな山手特有の雰囲気ですよ。それが残れば、地域全体がより魅力的になっていくと思います。

前所有者さんが「井戸を掘ると化石が出た」と言うので庭を発掘したら、133番館以前に建っていた震災前の建物と思われる遺構、瓦やレンガが確認できました。当時はJ・ジョンストン氏という人が住んでいて、英語教師として雇われて日本に来て、その後三菱に入社し、三菱が日本郵船と合併した後はストアマネージャーをやっていたようで、今は外国人墓地に眠っています。その後133番館が建ちましたが、ライジングサン石油会社が管理していた土地に建てられたと言われてます。土地の履歴を考えると、真の意味で横浜の個性を象徴する場所だと実感が沸きますね。本来、横浜にはそういった場所が沢山有るはず。

兼弘：この地が横浜の発展に関わった様々な人が折り重なった特異点的な所、ということが資料調査すると良く分かりますね。

山本：恐らく山手のどの場所もそういう歴史があるはずだけど、開発されちゃうと全然感じられなくなっちゃう。

兼弘：だから、これから50年、100年経った後にまた我々みたいな人が出てきたら、山本さんが133番館を残したことは偉業と言われると思いますよ。

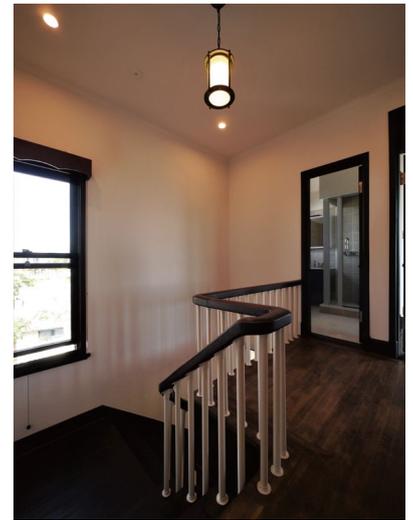
山本：いや、兼弘さんこそ、あちこちに歴史的建造物を残しているじゃないですか。一度冗談で「兼弘さん、そのうち教科書に載るんじゃない？」と言ったら、「僕は名前なんか残らなくて良くて、建物が残ればいい」と答えられたんですよ。凄くかっこいいなと思って。でも、多分本心から言ってるんですよ。

人には寿命があるし、会社だって長く続くか分からない。だから僕もずっと建物を持ってられる保証は無い。でも、少なくともこの建物を壊されづらくしてやったな、と思っているんです。これだけ美しく蘇らせたなら、どんな人でも「壊すのはしのびない」と思ってくれるんじゃないですか。

兼弘：今山本さんが言われたことは非常に核心的なことだと思います。歴史的建造物の付加価値を顕在化させること、それが歴史を生かしたまちづくりにとって一番くらいに大事なことですね。



一階サロンから庭園を眺める
扉は当初のスチールサッシを
修復し使用



左：二階寝室に備え付けのクローゼット
右：二階階段室

- 人に納得してもらうには理屈も大事ですが、視覚的に体感してもらうことが非常に重要ですよ。見れば一発で魅力を理解させられる、そういうレベルまで建物の良さを顕在化したという点で、本当に偉業と思っています。都市デザインは昨年 50 周年を迎えて代表的な事例が幾つか有りますが、例えば赤レンガ倉庫やドッグヤードガーデンといった例の共通点は直感的に良いと感じられる訴求力です。そういった意味で、133 番館は 50 年後に振り返って「エポックメイキングな事例だった」と言われるようなものだと思います。

兼弘：そうですね。だからこれから住む人も、残したいと思ってくれる人が来てくれたら良いな、と思いますよ。

アメリカでは建物の様式を守って綺麗に残して価値を継承していくと、不動産価値の向上に繋がる市場ができています。でも日本では古い建物は市場価値が下がっていくし、歴史的建造物の価値を理解してもらうのが難しい。そういう市場価値の違いは有るけど、間違いなく 133 番館は山手と言う地域のブランドを顕在化させたと思います。

山本：近くを通った人が言葉でなくて感覚で良いなと思ってくれる修復だと思います。言葉で説明しきらなくても、パッと見て理解してくれる。

兼弘：知らない人が公園だと思い入ってきたりしますよね (笑) プライバシーの問題はもちろん有るけど、改修としては成功している証だと思います。

山本：10/1 にやった内覧会兼オルガンコンサートも、応募が定員の 10 倍も来てくれたからね。ありがたいです。

兼弘：関先生が「修理の報告書は一般向けに出版しましょうよ」と言っていました。総括したり、記録したり、そうやって経過をちゃんと残していくことも大事ですよ。

- お二人が歴史的なものを守っていくことを志した、きっかけのようなものはありますか？

兼弘：私は東京藝大出身なのですが、2 年生の時に奈良の宿場町に二週間滞在して実測活動する、という授業が有りました。そこで肌で触れて素晴らしいなと思ったから、保存修復の研究室に行きました。同期が 17 人いて、半分は歴史的建造物の世界を嫌いになっちゃうんだけど (笑)。そのあと都市デザインを学びにボストンに留学していたんですが、最初はアメリカで歴史的建造物に係るような仕事ができないかと思ってました。でも自分はアメリカが地元な訳じゃなくて…ここにいるより、横浜に戻って文化の担い手になった方が良いんじゃないか、とふと思ったんですね。もう 30 年も前のことです。

山本：僕は横浜市立本町小学校に通っていたんですが、屋上から海が見えるんですよ。みなとみらいになる前の造船所やドックがある景色を絵にしたりしていました。その頃から、横浜は劇的に変わりましたよね。長く暮らすと、まちの歴史や景観の移り変わりに対して、色々思うところが出てくる。もちろん新しく良いものも沢山有るけど、失われてしまうものもある。

古くたって現代の価値観に勝るものがあるな、と常々思っていて、そういう物を身の回りに置いておきたいんです。例えば古写真も沢山、1000 枚くらいかな、持っていますが、それを見た若い子が「今よりかっこいい」と言うんです。



復元された外観は、昼夜で色とりどりに表情を変える

昔と今とで、100%今の街並みが優れているかというところではなく、幕末や明治時代のまちなみの方がかっこいい、という場所も有りますよね。

- 歴史を残す人もいれば新しく作っていく人もいて、それが合わさって一つのまちができていますよね。

山本：勝海舟が面白いことを言っていて…人間不思議なもので、色々な人がいるけど一つの長屋に入れるとなんだかんだ上手くやるんだ、みたいな。僕はそれに凄く共感するんだけど、色んな人がバラバラの感性を持っていて、それが共存している状態が良いな、と思います。歴史が好きな人もいて欲しいけど、全員じゃなくて、ある程度少数でも良いと思うんですよ。それで新しいものをどんどん作っていく人も必要で、そういう多様性が大事だなと。

山手資料館の移築をした勝烈庵の本多正道さんのこと、僕は凄く尊敬しているんですが、彼が馬が水を飲む浴槽みたいな、当時ではゴミ同然だったものを「これは宝だから捨てちゃいけない」と言って集めて残したりした。凄いことですけど、一方でその時代にそんな人が100人も200人もいたら変だとも思うんですよ。

兼弘：そういう当たり前のものって、誰も記録しないんですよ。我々が言う歴史って結構特殊なもので、「これは残さなきゃ！」と言ったものは記録していくけど、実は同時代でとても大事な「誰もが知っている当たり前のもの」は記録されない。本多さんの時代、洋館付き住宅は何千件もあったはず。それを残さなきゃ、というのはとても新しい価値観だったと思います。

山本：本多さんは、広大な敷地に洋館があってゆったり暮らす環境がマンション開発で失われていくことに危機感が有って、それを守りたくて土地を買って洋館の移築をやるうとした。環境を個人の力で守ろうとしたんですよね。

兼弘：やっぱり保存運動は何らかの危機感から始まりますよね。そこからまちづくりに繋がっていく。でも先見の明を持った人がいないと危機感も生まれません。

山本：山手資料館は移築当時だと、竣工から68年くらいの建造物だよ。当時の文化財的な感覚からすると非常に新しい。築何百年が当たり前の歴史的建造物の世界にあって、133番館の築90年は大したことないと思われるかもしれないですけど、本当に大事なものは50年、60年のう

ちからちゃんとマークしておかないといけない。

でも、横浜の魅力は新しいものと古いものが共存していることですよ。その両方が絶対に必要だと思う。みなとみらいができたことは大歓迎だけど、一方で歴史的な個性もしっかり守る、との両輪のバランス感覚がとても大事だと思います。

- 先ほど山本さんが仰った「色々な人が色々な価値観を持ってそれぞれ進めている状態」は、まさしく横浜のまちの姿そのものですよ。「居留地文化」「外国文化」みたいにまとめられがちですが、実際は日本人も含めて様々な国籍の人が違う文化を持って横浜に集ってまちができています。西洋館と言っても統一的なものではなくて、スパニッシュもあればインターナショナルスタイルもある、公営住宅もある、本当に多様な個性が有りますよね。そのごった煮感そのものが横浜の個性なんじゃないかと。

兼弘：街にはそれぞれ街柄みたいなものがあると思うけど、横浜の街柄って隣人を否定しないことだと思います。「それで横浜は良いんじゃないか」と色々なものを受け入れる気質がある。

山本：本当にそうですね。でもというか、だからこそなのか、「歴史を大事に」という人は、数としては意外と少ないと思います。全体性としてはある意味結構ドライで、少ないけど、熱い人はとことん熱い。

兼弘：でも、だいぶ市民権を得てきたなあとも思いますね。私も横浜のまちで30年くらい活動してきて、随分変わったなという印象がある。

やっぱり私たちがやるべきなのは、今できることをやって次の世代に受け渡していくこと。100年も生きられるわけじゃないからね。次世代に理念もセットで継承していくことが大事だと思います。

山本：そうだね。継承していく、次に繋いでいくことが一番大切。

- 本日はありがとうございました。

令和4年10月4日 於 山手133番館

